

地方の進学希望高校生の転出意識 —生徒と保護者のペアデータの分析—

吹野 卓*・片岡 佳美*

College-bound students' intention of moving out of a small regional city to Metropolis : An analysis based on parent-child pair data

Takashi FUKINO, Yoshimi KATAOKA

要旨 鳥根県は過疎高齢化の先進地帯である。この問題はさまざまな側面から生じているが、若者の県外流出も重要なひとつの要因となっている。本研究は、特に進学という形で流出していく若者のありようを、高校3年生の生徒とその保護者の両方に尋ねた質問紙調査によるデータから明らかにしようという試みである。

高校生の都会に対する認知や人生観、親が子の幸せのために重視する項目などが、ふるさとに戻らないという高校生本人の予測にどのように繋がっているのかについての一定の知見を得、また地方進学層の家族で紡ぐ物語がどのようなものであるのかの示唆を得ることができた。

キーワード：人口流出、地方からの進学、家族実践、親子ペアデータ

1. はじめに

少子化がますます進む今日、人口減少はもはや全国的な問題である。だが、地方では若年層の人口流出とそれに伴う高齢化といった問題もあり、事態は都市部以上に深刻である。

図1は、鳥根県の2019年10月推計人口報告から作成した過去1年間の転入と転出との差、すなわち社会増減を年齢別に示したものである。全年齢では775人の減であるが、20～24歳については928人減と社会減の

大きな要因がこの年代の転出にあることがわかる。

この年齢層での転出の理由は、就職と進学が主たるものと思われる。特に鳥根県の場合に典型的なように、就職先が限られているだけでなく、私立大学が無いなど、高等教育機関の選択肢が不足していることも大きな要因となっている。

筆者のひとりである片岡は、2015～16年に鳥根県内で高校生を育てている父親・母親に対してインタビュー調査を行なった。そ

*鳥根大学法文学部社会文化学科

地方の進学希望高校生の転出意識

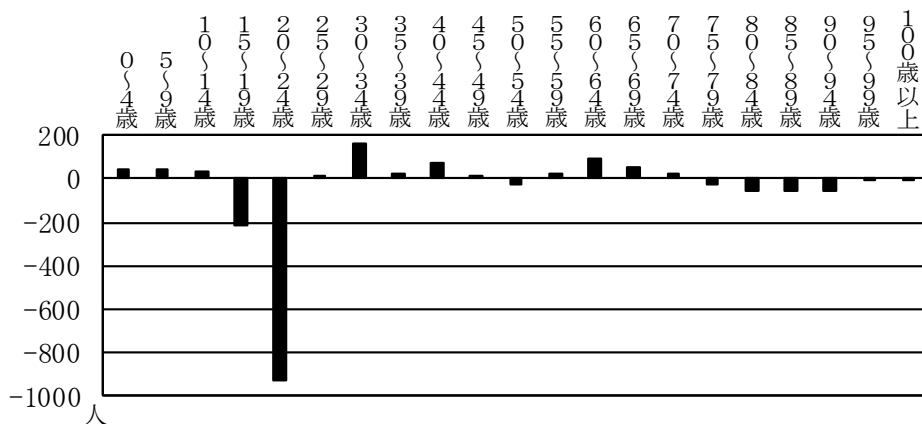


図1 島根県1年間の転入人数と転出人数の差（年齢別）

の調査では、「子どもとの家族生活は高校卒業まで」と区切りを設け、県外の大学に進学させることを目標に家族生活を作り上げている親たちの姿が浮き彫りになった。片岡は、地方独特の家族実践の存在と、それが地域の人口問題に影響していると指摘した（片岡、印刷中）。

これを受け、本論文では、地方のひとつの典型としての島根県において、高校卒業後の転出可能性を親子関係を枠組みに入れつつ概観しようとする。「家族が地域人口をつくり出す主体としてその地域との関係を改めて研究することが求められる」（廣嶋、2016:56）にもかかわらず、そうした研究は少ない。一方、本研究は地域移動をテーマとするが、社会移動をもう少し広く捉えて階層移動なども含めて考えれば、階層移動と家族の関係について論じた調査研究は多数あり、有名な知見もいくつかあることに気づく。たとえば、親の社会経済的地位が子どもの社会経済的地位に影響するといった知見などはよく知られている。しかし、家族がそうした社会移動に「影響する」ことは明らかにされていても、「階層の再生産における家族内部の働きを解明することは、家族社会学に課せられた課題」（直井、1996:12）のままで、いまだ解決してい

ないと言ってよい。本研究は、移動（この場合は地理的移動）を生じる家族内部の働きに注目し、この課題に取り組み、従来の研究に欠落していた部分を埋めようとする試みの一環をなすものである。

2. 調査の概要

ここで用いるデータの特徴は、高校生とその保護者の両方に尋ねた調査票データをペアとして分析に用いることができる点にある。これにより親の思いと、その子である高校生の考えとを付け合わせる事が可能となる。

調査対象としたのは松江市内の3つの普通科をもつ高校の3年生で、調査時期は2019年9月である。これらの高校はいずれも松江市内では進学者比率が高い高校である。

表1 分析対象者の概要

	高校生性別		計
	女	男	
北高校	112 53.1%	99 46.9%	211 100.0%
東高校	86 52.8%	77 47.2%	163 100.0%
南高校	72 67.9%	34 32.1%	106 100.0%
計	270 56.3%	210 43.8%	480 100.0%

ここでは、進学希望者に関する分析を行うために、調査票で高校生本人に尋ねた「大学には絶対に進学したい」という問いに対して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した者のみを分析対象とする。その結果、当初の512件の有効回答数のうち、実際に分析対象とするのは480件となった。その内訳は表1に示したとおりである。

今回、回答者の協力を得るために調査票はコンパクトに納める必要があった。そのため質問数は限定的なものにならざるを得なかったが、高校生本人には性別と、都会や地域、進学や将来に関する思い（5点尺度）を尋ねている。一方、保護者には子どもに対する関わりかた（4点尺度）や、子どもの幸せにとって重要だと思えるもの（5点尺度）について尋ねている。いずれも、「そう思う」ほど高い得点となるようにしている。

3. 高校生の都市への移動意識

まず高校生本人の、高校卒業後の移動、再び県内に戻る可能性、そして進学校の生徒の転出の契機として大きな意味をもつ大学への進学意志の3つを中心として、それらが高校生がいだくさまざまな思いとどのような関係を持っているのかを見ていこう。

高校生がいだくさまざまな思いを変数として整理するために、人生の目的に関わりがあ

る思い、地域と関わりがある思い、都会のイメージなどについて主成分分析または因子分析を行なった（固有値が1以上の因子が2つ以上抽出され回転をかけた方がわかりやすい場合には因子分析を行なった）。その結果が表2～4である。

人生の目的に関わりがある思いに関する項目で分析した際の第一主成分に「野心」、地域と関わりがある思いに関する項目で分析した際の第一主成分に「地域志向」と名付けた。また都会のイメージの第一因子は「都會有利」、第二因子は「都會苦勞」と呼ぶことにする。それぞれがどのような質問項目と関係しているのかは表を参照して頂きたい。

なお、調査票には、都会に関する質問項目として、表4に取り上げた項目の他に「都會

表2 「野心」尺度（主成分負荷量）

	野心
将来は、海外で活躍する人になりたい	0.72
平凡な人生でよい	-0.68
社会的・経済的に地位が高い人になりたい	0.66

表3 「地域志向」尺度（主成分負荷量）

	地域志向
自分のふるさとに誇りをもっている	0.90
自分が育った地域のために、何か役に立つことをしたい	0.90

表4 「都會有利」と「都會苦勞」の尺度（因子負荷量）

	都會有利	都會苦勞
都會の人は、地方の人より得をしている	0.84	0.01
都會に出なければ、「勝ち組」にはなれない	0.47	0.02
都會であくせく生きていくのは嫌だ	-0.06	0.64
都會で一人で生活していく自信がない	0.08	0.50

※主因子法、プロマックス回転

表5 高校生からみた親との関係（「親子親密」「自立志向」尺度の因子負荷量）

	親子親密	自立志向
親が高齢になったら、親の身の回りの世話は私がするだろう	0.60	-0.03
親に経済的な負担をあまりかけたくない	0.58	0.19
大事なことは、親に相談するようにしている	0.51	-0.19
早く親から自立したい	-0.01	0.36

※主因子法、プロマックス回転

にはあまり魅力を感じない」という問いも含まれていた。これは当然ながら都会イメージに関する因子と強く結びついているが、イメージから派生する魅力であると考え、あえて分析的に別の扱いをしたい。またこの問いは否定形で聞いているため、逆転して「都会魅力的」という変数として分析に含めたい。

さらに、親子関係に関する高校生側の思いについて、表5に示した因子分析から作成した変数を分析に含めることにする。この表7に示された第一因子は「親子親密」、第二因子は「自立志向」と呼ぶことにしたい。

以上、高校生本人の意識や認知に関する尺度として、生き方の姿勢である「地域志向」と「野心」、都会イメージの認知に関する「都会有利」と「都会苦勞」、その結果とも言える「都会魅力的」、そして親との関係に関する「親子親密」と「自立志向」、の7つの変数を準備した。

さて、上記の諸変数から、将来の移動に関する本人の予測はどのように説明されるのであろうか。その分析のために、移動に関する項目から高校卒業後の移動、再び県内に戻る可能性の2つについて以下のように変数化した。

まず卒業後の移動および再び県内に戻る可能性についての尺度を構成するために、表6と表7に示した主成分分析を行い、抽出された主成分を「卒後都市へ」および「戻らな

表6 「卒後都市へ」尺度（主成分負荷量）

	卒後都市へ
高校卒業後も、今住んでいる地域に残りたい	-0.85
高校卒業後、少なくとも一度は都会で暮らすことになるだろう	0.85

表7 「戻らない」尺度（主成分負荷量）

	戻らない
老後は、島根で暮らしたい	-0.88
現実的に考えれば、自分は今後、県外に出て、もう戻らないというコースを辿るだろう	0.88

い」と名付けた。

以上の諸変数間の関係を段階的に重回帰分析にかけた結果をパス図で示したのが図2である。重回帰分析は段階的に行っており、各変数名より左側にある全ての変数を独立変数としたモデルである。なお煩雑さを避けるため、図に示した矢印は有意な関係があったもののみにとどめてある。また正の関係は実線、負の関係は点線で、標準化係数が ± 0.2 以上の関係を示しているものは太線で記した。

図2を見ると、「卒後都市へ」は様々な要因と関係している。進学する地方の高校生にとって卒業後の都市への移動は、ひとえに大学選択の問題である。特に島根県に関しては県内に私立の四年制大学はなく、県内進学

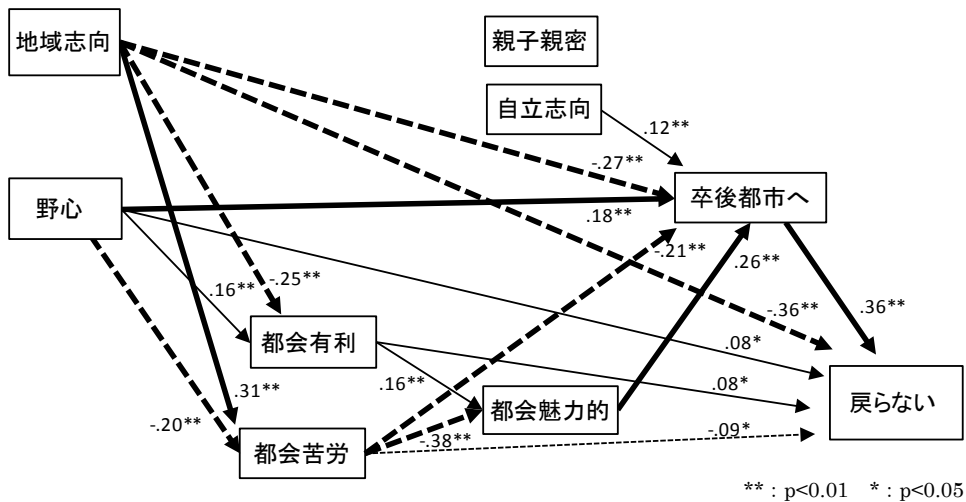


図2 高校生回答項目内での変数間の因果関係図

選択肢の幅はきわめて狭いものに過ぎない。にもかかわらず、9月段階の高校3年生という進学希望の形がかなり見えている生徒たちにとっても、都市部の大学への進学が、本人の郷里への愛着（「地域志向」）や都会への恐れ（「都会苦勞」）、あるいは親からの自立志向によってある程度まで規定されていると言えよう。すなわち、学力や志望する専攻分野といった通常の大学選択理由とはまた別の要因が働いているのである。

また、一度郷里を出たら長い将来にわたって戻って来ないという予測（「戻らない」）に主として影響を与えているのは、「地域志向」と「卒後都市へ」である。その一方で都会に対する認知や魅力はごく弱い関係しか示していない。特に「卒後都市へ」が他の変数をコントロールした後にもかなりの影響力を持っていることに注目したい。都会が魅力的だから戻らないのではない。都市の大学に進学して、その成り行きとして戻らないというイメージを持っているとも解釈できよう。これは、筆者らがこれまでインタビュー調査等で蓄積してきた考えから眺めると、地方の進学層の家庭においては、「18歳になると出て行

く」ということを前提として家族実践のシナリオが組み立てられ、そのシナリオを実行していく状況が垣間見られるものとも思われる。ただし、この点を明らかにするには更なる調査が必要である。

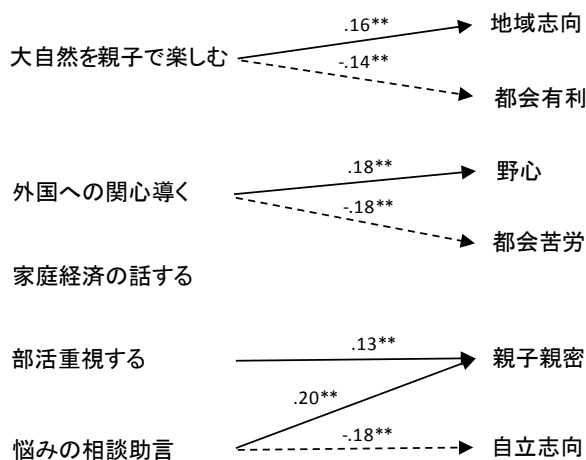
4. 親の関わりとの関係

さて、われわれのデータの最大の特徴は、高校生とその保護者の両方に尋ねた質問をペアとして分析可能なことである。

まず「お子さんを育てていくなかで、次のことはどのくらいしてきましたか」という問いで、「島根の海や山などの大自然を親子で楽しむ」、「子どもが外国への関心を高めるよう導く」、「子どもの悩みの相談に乗り、助言する」、「家庭の経済状況について親子で話をする」、「子どもの部活動を重要視する」の5つの活動を行ってきた程度（「積極的にしてきた」から「全然してこなかった」までの4段階）を尋ねている。

これらの項目と、高校生本人の移動に関する予測変数である「卒後都市へ」や「戻らない」には直接の関係はほとんど見られなかつ

地方の進学希望高校生の転出意識



** : p<001 * : p<005

図3 親が子どもにしてきた活動と高校生の意識や認知の変数の関係
(重回帰分析による標準化係数)

表8 保護者からみた「子どもの幸せのために重要なこと」の因子分析結果

	ふるさと	都会成功	広く夢	安定
進学や就職で一度は県外に出たとしても、いずれはふるさとに戻ってくること	0.91	0.02	-0.00	0.00
ふるさとに誇りをもって住み続けること	0.81	-0.04	0.13	-0.00
親(あなた)と一緒に、または近所で暮らすこと	0.67	0.12	-0.17	0.06
都会の有名な大学に入ること	-0.17	0.72	-0.02	0.09
都会で大成し、一角の人物になること	0.24	0.70	0.08	-0.14
さまざまな価値や文化と接し、視野を広げること	0.11	-0.15	0.63	0.23
地元定住にこだわらず、もっと広い世界に出てがんばること	-0.19	0.21	0.62	-0.01
たとえ収入が不安定になっても、自分のしたいことや夢を追求すること	0.04	0.11	0.32	-0.29
就職活動のために、資格や免許を取っておくこと	0.05	-0.06	0.20	0.67
公務員や大企業など、収入や地位が安定した仕事に就くこと	-0.01	0.36	-0.13	0.50

※主因子法、プロマックス回転

た。ただし、高校生本人の意識や認知に関する諸変数とはある程度関係が見られた。

図3は、重回帰分析による結果(標準化係数)を図示したものである。ただしその関係はあまり強いものとはいえない。従って、調査票で測定した家族での活動は、本人の移

動予測に対して間接的で弱い効果しかもっていなかったと言えよう。

調査票ではまた、「お子さんの将来の幸せのために、次のようなことは重要だと思いますか」という問いで、10項目について「とても重要」から「まったく重要でない」まで

表9 保護者からみた「子どもの幸せのために重要なこと」と高校生の意識等との単純相関

	高校生本人の意識や認知							移動に関する本人予測	
	地域志向	野心	都會有利	都會苦勞	都會魅力的	親子親密	自立志向	卒後都市へ	戻らない
ふるさと	.24 **	-.12 *	-.11 *	.17 **	-.11 *	.13 **	.01	-.25 **	-.34 **
都會成功	-.08	.15 **	.06	-.08	.07	-.03	.06	.15 **	.11 *
広く夢	-.11 *	.21 **	.07	-.20 **	.17 **	-.03	.13 **	.26 **	.27 **
安定	.08	-.06	-.01	.12 **	-.07	.10 *	-.06	-.12 **	-.18 **

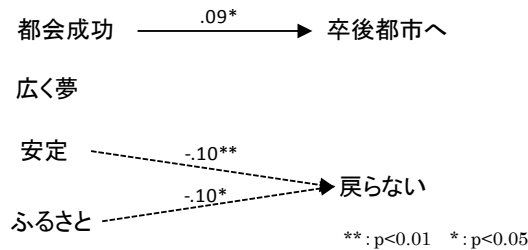
**: $p<0.01$ *: $p<0.05$ 

図4 保護者が重要と思うものと移動に関する本人予測
(高校生本人の意識や認知に関する諸変数も含めた重回帰分析による標準化係数)

の5段階で測定している。これらの項目について因子分析をした結果の因子負荷量を示したのが表8である。

表8に示したように、各因子を「ふるさと」、「都會成功」「広く夢」「安定」と呼ぶことしたい。これらの保護者の回答から作成した「ふるさと」、「都會成功」「広く夢」「安定」の4変数と、高校生本人の変数との間の相関係数を示したのが、表9である。この単純相関係数を見ているかぎりでは、親の思いは、高校生よる移動に関する本人予測の変数ともかなり関係をしているようである。

はたしてこの関係が直接的な効果を意味するものであるのかを見るために、高校生本人の意識や認知に関する変数と共に重回帰分析を行った結果が図4である。この図に示されているように、高校生本人の意識や認知をコントロールした後は、移動に関する本人予測への直接の効果は決して大きなものではない。

とはいえ、単純相関でそれなりの関係を持っていたということは、家族として共有する何かが存在していることを示唆している。親から子への影響は、おそらく単純なものではなく、親と子の相互作用の中で、家族として作りあげ、また維持していく人生のありよう、家族のありようについての物語の中で理解せねばならないのではないだろうか。

5. 高校生本人の性別に関する分析

表10は、これまで出てきた変数の中で、高校生本人の性別によって平均値に有意な違いがあった変数を示したものである。なお、「都會魅力的」以外は標準化された因子得点または主成分得点の平均点である。

表10を見ると、女子生徒が高いのは「都會魅力的」と「親子親密」であるのに対し、男子生徒は女子よりも野心的で、自立志向であるといえる。更に男子は「戻らない」と予

表 10 高校生本人の性別によって平均値に有意な差があった変数

		高校生本人の性別		t 値
		女	男	
生徒回答	野心	-.132	< .151	-3.13 **
	都会魅力的	3.82	> 3.62	2.10 *
	親子親密	.087	> -.113	2.85 **
	自立志向	-.065	< .077	-3.40 **
	戻らない	-.079	< .124	-2.20 *
保護者回答	都会成功	-.110	< .103	-2.70 **

** : p < 0.01 * : p < 0.05

測していることがわかる。また、保護者の回答の変数の中で、唯一有意な差があったのは「都会成功」であり、すなわち男子に対しての方が、有名な大学に入り、都会でひとかどの存在になることが幸せのために重要だと思われる。表 11 は、「戻らない」を従属変数、高校生本人の意識や認知の変数を独立変数として、本人の男女別に重回帰分析を行った結果である。

表 11 「戻らない」を従属変数とする重回帰分析結果（標準化係数）

	高校生本人の性別	
	女	男
地域志向	-.36 **	-.38 **
野心	.10 *	.03
都会有利	.04	.14 *
都会苦労	-.18 **	.05
都会魅力的	.00	-.11
卒後都市へ	.30 **	.48 **

** : p < 0.01 * : p < 0.05

「地域志向」が「戻らない」に負の効果を持っている点は男女共通である。しかし、男子は「都会苦労」がどうであれ、そして都会に魅力を感じているか否かにかかわらず、ひとたび都会に出たら戻ってこないという覚悟でいると言えよう。既にみたように「戻らない」の平均値は女子より男子で高いのである。

6. おわりに

以上、高校生と保護者のペアデータをもちいて、地方の進学層の高校生の移動意識とその背景を探ってきた。

全体として、本人のふるさとの愛着と親がそれを重要視していることが、移動を抑制していることは、当然ながら確かなことであろう。しかし、それだけではなく、進学となれば多くの場合、都会への移動を考えねばならず、そしてその移動自体がもう戻ってこないという予測に繋がっていることも見えてきた。

そして、地方の進学層の家族のなかでは、18歳が別れのときであり、それに前提として家族実践のシナリオが組み立てられ、そのシナリオを家族の物語として実演していることが示唆されたと思われる。さらに、そうしたシナリオは、子どもが男子の場合に、より明確なものである可能性も示された。

いずれにせよ、進学という人生のイベントは、特に地方の家族において大きな意味を持っている。冒頭でみたように、たとえば島根県のような人口流出が進む地域にとって、進学による転出は人口減少の大きな要因となっている。この問題を、家族実践、すなわち家族をどのように生起させ、維持していくのか、そしてそのために組み立てられたシナリオはいかなるものであるのかから問い直す

ことには意味があるであろう。

この研究は、4年間の研究計画の第一段階と位置づけられるものであり、筆者らは上記の点を踏まえつつ、今後さらなる研究を進めていく予定である。

※本研究は JSPS 科学研究費 (19K02076) の助成を受けたものである。

引用文献

- 廣嶋清志, 2016, 「地域人口問題と家族研究」『家族社会学研究』28(1), 56-62。
- 片岡佳美, (印刷中), 「親は子どもの県外移住にどのように関与したのか—島根県若年層人口流出と家族実践についての一考察—」『ソシオロジ』197。
- Morgan, D. H. J., 2011, Rethinking Family Practices, Palgrave Macmillan (野々山久也・片岡佳美訳, 2017, 『家族実践の社会学—標準モデルの幻想から日常生活の現実へ—』北大路書房)。
- 直井道子, 1996, 「社会階層と家族」『家族社会学研究』8, 7-17。

